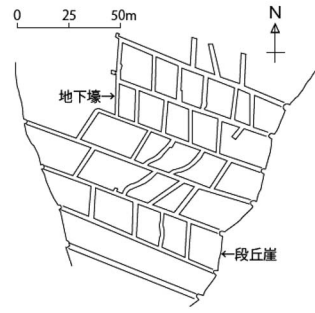


みんなは芹沢公園に行ったことがあるかな？ 「芹沢公園の地下壕（大きな穴）」について調べてみましょう！



地下壕の正体は？

芹沢公園の大きな穴は、今から約75年前の太平洋戦争中に作られた地下壕です。その頃、芹沢公園の近くには高座海軍工廠という飛行機工場がありました。厳しさを増す空襲を避けて、働いている人の安全を確保するために、この地下壕が作られたのです。



地下壕は「あみだくじ」のように張り巡らされていて、長さは合計1.5キロメートルにもなります。また、機械を使わずに、「つるはし」などを使って手で掘られたといわれています。

出典：高木孝他 (2013) 『神奈川自然誌資料』第34号より

高座海軍工廠とは？

太平洋戦争中にアメリカの爆撃機B29を迎撃するために雷電という飛行機が作られました。その雷電を作っていた工場の一つが、高座海軍工廠です。



この工場の中心部は現在の東原の辺りに広がり、広さは約100ヘクタールでした。南北は相鉄線さがみ野駅から東中学校の辺りまでの約1.5キロメートル、東西はひばりが丘から東原の約0.7～1.2キロメートルありました。右の地図の灰色の部分が高座海軍工廠の中心地です。

出典：「航空ファン別冊 世界の傑作機シリーズ7集・雷電（株式会社文林堂刊）」より



敷地の全体は現在の座間市、大和市、海老名市、綾瀬市にまたがり、組立工場・将校宿舎・工員寄宿舎・倉庫・診療所などがありました。

誰が働いていた？

工場では約1万人が働いていましたが、その内約8割は十代の台湾出身の少年工でした。台湾で行われた選抜試験に多くの少年が応募し、試験に合格した優秀な少年たちが座間にやってきたのです。

少年工たちの生活はとても厳しいものでした。毎日の工場での労働の他、冬には寒さで凍傷や霜焼けになったそうです。

しかし、月に2回あった休みの日には買い物をしたり、江ノ島に遊びに行ったりして、楽しかったという証言もあります。

台湾少年工との交流

昭和20年（1945年）8月に太平洋戦争が終わりしばらくして、元少年工たちは台湾に戻りました。終戦後も地域の方などと交流を続け、彼らが初めて日本に来てから75年後の平成30年（2018年）10月にも、元少年工たちが来日し、座間市役所を訪れました。元少年工の李雪峰さんは「日本で受けた優しさや教育の良さは忘れません。地域の方の優しさは、胸に染みしました」と話し、地域の方への感謝の気持ちを伝えました。



あいさつをする李雪峰さん

地域の農家のお母さんたちの優しさに触れた元少年工たちは、今でもここを「第2のふるさと」と呼んでいます。

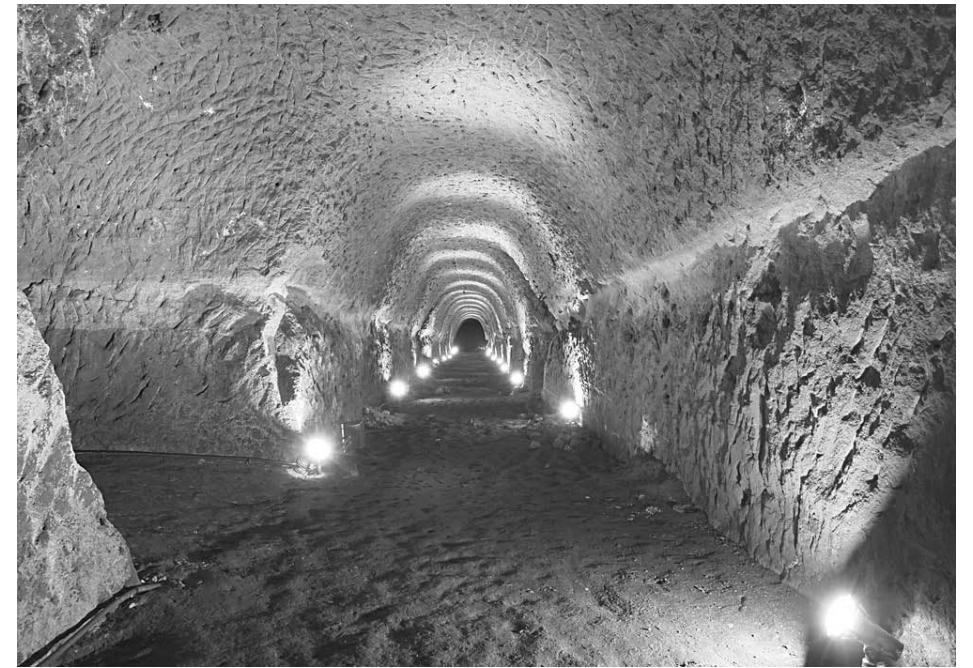
工廠の跡地は何になっている？

高座海軍工廠が作られた場所は、元々農地や林が広がる地域でした。戦争が終わって工場が必要なくなったあと、建物の鉄骨の一部が旧国技館に使われたり、機械が東南アジアの国に送られたりしました。工場があったところは地元の人たちに返された後に、がれきなどを取り除いて、元のような農地に戻されました。

その後、日本が経済的に発展するにつれて、農地は工場や住宅に変わっていきました。今では工場や大型スーパー、住宅地が広がる地域になっています。

今、地下壕の中は？

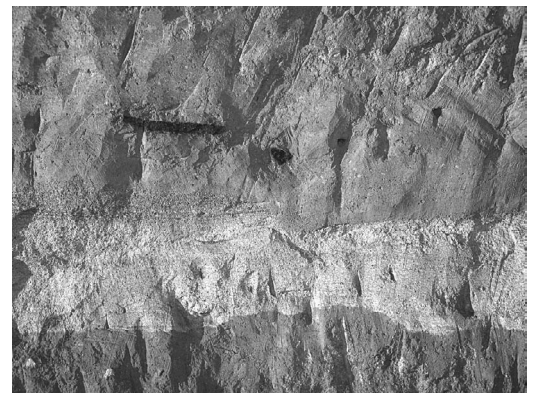
地下壕は壁が崩れているところもあり、中に入ることはできません。地下壕の中にはほとんど生き物がいませんが、中にアライグマが入っていくのを見た人もいます。



ライトアップされた地下壕の内部

地下壕の中にある白い層は何？

地下壕の壁には、40センチメートルほどの白い帯状の地層が見られます。これは「箱根東京軽石層」といって、約6万6千年前に箱根火山の噴火によって火山灰が降り積もってできたものです。



座間の歴史を調べてみよう！

座間市には芹沢公園の地下壕以外にも興味深い歴史がたくさんあります。夏休みの自由研究などで調べてみましょう。

参考文献

- 『座間の語り伝え 外編1・軍事施設の進出』（座間市教育委員会）
- 『目で見る座間』（座間市教育委員会）
- 『高座海軍工廠関係資料集—台湾少年工関係を中心に—』（大和市）

